

令和7年産水稻の生育状況について

令和8年1月
備前広域農業普及指導センター

1 気象の経過と生育状況

(1) 気象経過

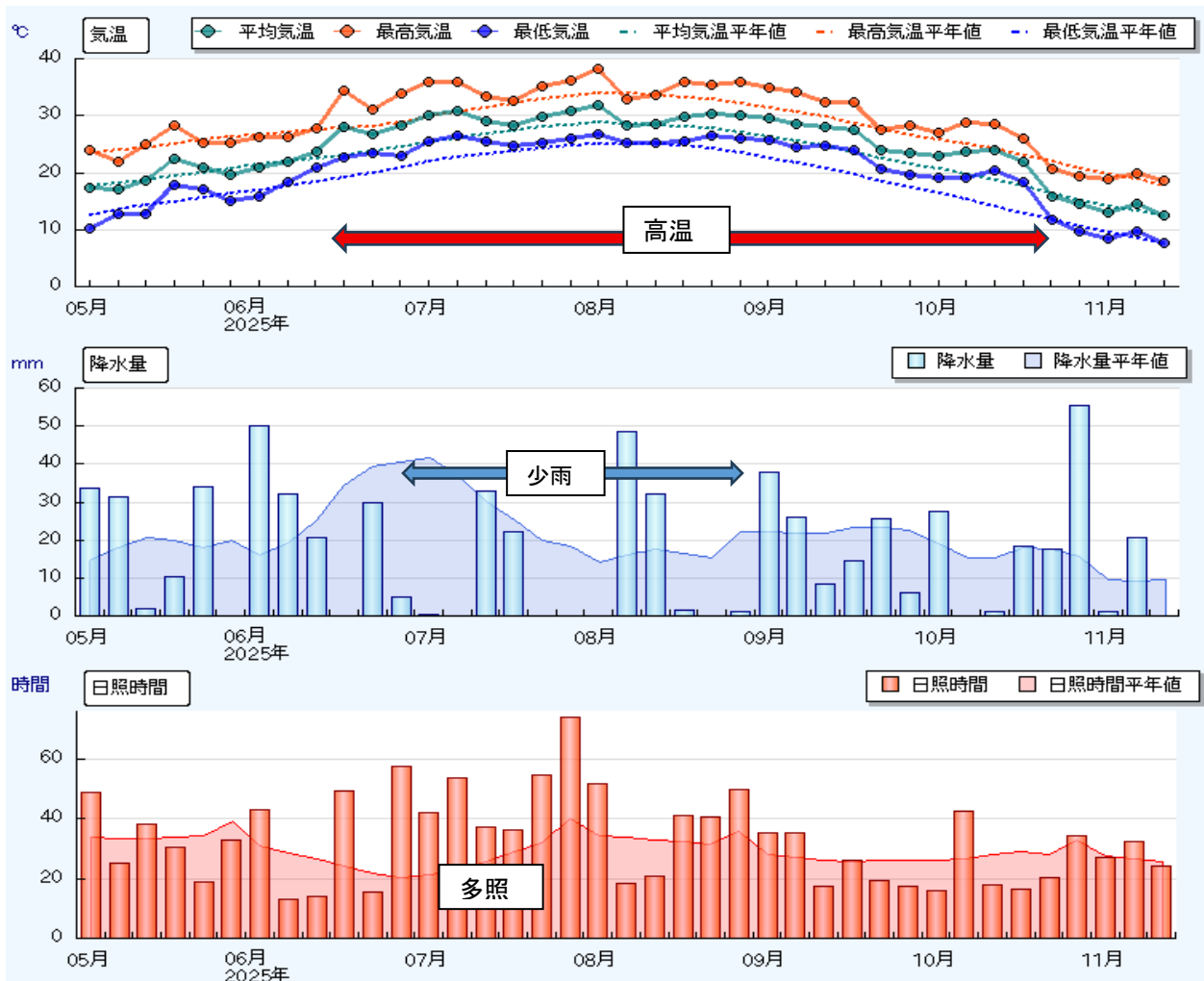


図1 気象データ(岡山)

(2) 気象概況

- ・6月の気温は中旬以降高温で推移した。降水量は平年より少なく、日照時間は平年よりやや多かった。
- ・梅雨は5/16～6/27で、梅雨入りは平年より21日早く、梅雨明けは22日早かった。
- ・7月の気温は高温で推移し、平均気温は平年より約2.8℃高かった。降水量は平年の約31.3%で一部地域では渇水状態に陥った。
- ・8月は高温で推移し、平均気温は平年より約1.8℃高かった。降水量は、10日に40mm、11日に28mmの強い雨が降ったが、月間では平年の約85%であった。
- ・9月、10月はかなり高温で推移し、平均気温は9月が2.9℃、10月が2.3℃、平年より高かった。降水量は、台風15号の影響で9月4日に16mm、5日に22mmのまとまった降雨があった。また前線の影響で曇雨天が多く、周期的にまとまった降雨があった。9月の降水量は平年の83%だったが、10月は126%と多くなった。

(3)生育状況

【中生・晩生品種（県南部）】

- ・分げつ期 移植後は概ね順調だったが、移植時期が遅れたほ場では一部で植え傷みや除草剤の薬害の発生が散見された。
藻類の発生が多く、初期生育が抑制されたほ場が見られた。また除草剤の効果が不十分なほ場があった。
少雨の影響で、天水やため池がかりのほ場の一部で生育抑制や枯死が見られた。
乾田直播では、周期的な降雨の影響により、一部でほ場準備が遅れたが、6月上旬には播種作業が終了した。その後も降雨の影響で、適期除草ができず、雑草が発生したほ場が見られた。
中干終了後、生育は旺盛になり、葉色は濃く推移した。
- ・出穂期 きぬむすめはやや早くなったが、その他の品種はほぼ平年並みとなった。

表2 管内の出穂期(令和7年産)

品 種	きぬむすめ	ヒノヒカリ	にこまる	朝日	アケボノ
出穂期	8/18～22	8/26～8/30	8/29～9/2	8/31～9/4	9/1～5

- ・成熟期 平年よりやや早かった。
- ・病害 ヒノヒカリ、アケボノで紋枯病や褐変粃の発生が多くみられた。出穂期に降雨があった朝日で粃枯細菌病が散見された。また、高温による止葉の赤枯れ症状がヒノヒカリ、きぬむすめでみられた。
- ・虫害 8/6 斑点米カメムシ類の注意報が発表されたが、大きな被害はなかった。
- ・気象被害 9/10の26mmの降雨で倒伏が始まった。その後の周期的な降雨で倒伏が広がった。高温で推移したため外観品質の低下につながったほ場がみられた。
- ・収量品質 高温障害回避のための追肥や間断灌漑に努めたが、昨年同様「白未熟粒」「充実不足」などがみられた。また9月中旬以降、早めに倒伏したほ場ではその後高温で推移したため外観品質の低下がみられた。



(4)作況指数

表3 令和7年産水稻の作況単収指数（12月12日現在、農林水産省公表）

地 域	岡山県全体	10a あたり予想収量（対前年差）	
		県南部	県中北部
10a 当たり収量（1.70mm）	513kg（+17 kg）	523kg（+14 kg）	494kg（+21 kg）
作況指数（1.85mm）	103		

※作況単収指数：生産者が使用しているふるい目幅ベース（1.85 mm）で算出した 10a あたりの収量の前年産までの5 か年中3 年平均に対する 10a あたり予想収量の比率

(5)定点観測結果

・管内の6カ所の定点観測の結果では、穂数は平年並みからやや多めとなり、くず米は平年より少ない傾向となった。コシヒカリ、晩生品種の収量は穂数に比例し、平年並みからやや多めとなったが、ヒノヒカリは高温登熟の影響とみられる白未熟が多く発生し、収量は平年よりやや少なくなった。

品種 (作型)	場所		出穂期	穂数	精玄米重	屑米重	等級
				(本/㎡)	(kg/10a)	(kg/10a)	
コシヒカリ (田植)	吉備中央町 黒土	本 年	7月29日	469	575	34	1 等
		平 年	8月4日	382	541	37	
		平年比	早6日	123%	106%	92%	
ヒノヒカリ (田植)	岡山市 東区政田	本 年	8月29日	353	476	16	3等
		平 年	8月28日	381	537	55	
		平年比	遅1日	93%	89%	29%	
ヒノヒカリ (田植)	岡山市 南区藤田	本 年	8月30日	439	486	25	規外
		平 年	8月29日	400	574	51	
		平年比	遅1日	110%	85%	49%	
朝 日 (田植)	岡山市 南区北七区	本 年	9月3日	324	565	11	2等
		平 年	9月5日	345	522	26	
		平年比	早2日	94%	108%	42%	
アケボノ (乾田直播)	瀬戸内市 邑久町山田庄	本 年	9月3日	339	613	23	規外
		平 年	9月4日	323	569	25	
		平年比	早1日	105%	108%	92%	
雄 町 (田植)	岡山市 北区御津	本 年	8月29日	240	440	110	1等
		平 年	8月30日	236	399	101	
		平年比	早1日	102%	110%	109%	

2 品質低下の原因について

(1)高温障害について

- ・高温登熟障害の主な症状は、①玄米が白濁する、②粒張りが低下する、③玄米一粒重が低下することとされている（農林水産省 2006）。
- ・九州沖縄農業研究センターによると、白未熟粒の発生と高温条件との関係は、出穂後 20 日間の日平均気温によって生じてくるとされている。

(2)本年の状況

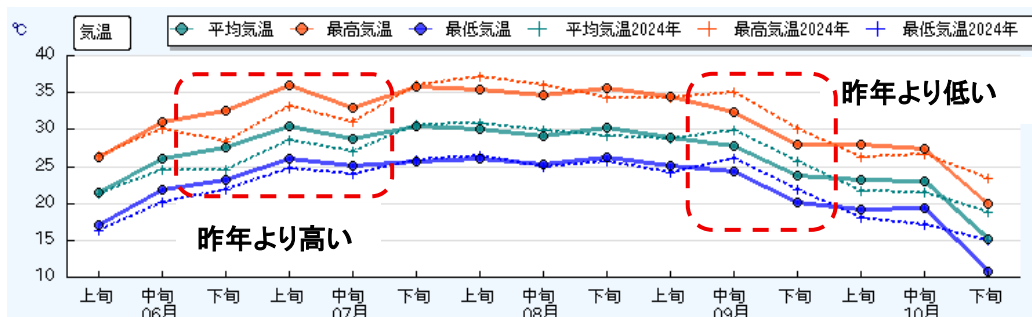
- ①「きぬむすめ」については、出穂後 20 日間の日平均気温の平均値が 26℃以上になると、白未熟粒の発生率が増加するが、本年度では 30.2℃となっている。（8/15 出穂）
- ②「ヒノヒカリ」については、出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以上になると、白未熟粒の発生率が増加するが、本年度では 29.1℃となっている。（8/25 出穂）
- ③「朝日」「アケボノ」の出穂期は通常9月以降であり、平年であれば出穂後 20～25 日間の日平均気温の平均は 25℃を下回るが、昨年と同様に、本年度も 25℃以上であった。

表4 出穂後の日平均気温の平均

出穂日	出穂後20日間の 日平均気温の平均(℃)			出穂後 25 日間の 日平均気温の平均(℃)		
	R7年度	平年値	平年値との差(℃)	R7年度	平年値	平年値との差(℃)
① 8/15	30.2	27.4	+2.8	29.8	27.1	+2.7
8/20	29.9	26.8	+3.1	29.4	26.5	+2.9
8/25	29.2	26.1	+3.1	② 29.1	24.8	+4.3
8/30	28.8	25.3	+3.5	28.0	24.6	+3.4
9/5	27.3	24.4	+2.9	26.5	23.7	+2.8
③ 9/10	26.2	23.4	+2.8	25.2	22.7	+2.5

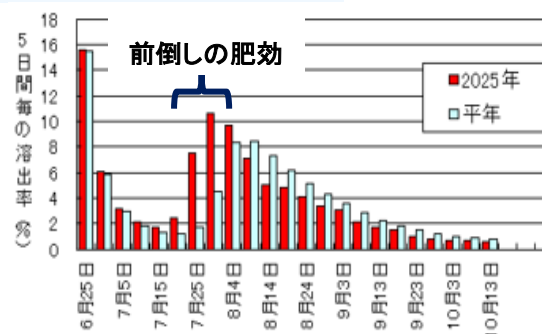
(3)昨年との比較

昨年と比較すると、6 月下旬から 7 月にかけての気温が高く推移している。出穂後は高温条件下ではあったが、9 月中下旬の気温は昨年より低くなっている。



(4)まとめ

- ・倒伏したほ場については緩効性肥料の肥効が 7 月の高温で前倒しに溶出したと思われる。そのため中干後、一気に肥効が出て草丈が伸び倒伏につながったと推察される。
- ・出穂後、9 月中旬以降は昨年より気温が低く推移したため、中生品種は高温障害が発生したが、晩生品種については昨年ほどの品質の低下はみられなかった。



3 次年度対策

(1)土作り

- ・土壌の肥沃度を高めるため、稲わら、堆肥等の有機物を施用するとともに、土壌の化学性に応じてケイ酸資材、含鉄資材、リン酸資材等の土づくり資材を施用する。
- ・作土の浅いほ場やち密な盤層が形成されているほ場は、深耕によって十分な有効土層を確保する。

(2)病虫害対策

- ・生育前半は、移植栽培では苗箱施用剤で病虫害の防除を行う。
- ・生育後半は、出穂期前後の基幹防除と必要により随時防除を行う。

■いもち病■

- ・葉いもちは、6月下旬から7月下旬に発生が確認されることが多い。
- ・「コシヒカリ」「あきたこまち」は、特に発生状況を確認する。
- ・多肥栽培、山際、過繁茂ほ場等は、発生しやすいので注意する。
- ・進展型の葉いもち病斑が見られた場合は、被害が急激に拡がるので、早急に防除する。薬剤散布しても、天候不順で病勢が増す場合は、追加散布する。
- ・穂いもちは、粉・液剤の場合は、出穂直前と穂揃期の2回、粒剤の場合は出穂前10日～14日頃に薬剤散布する。
- ・田植後の置き苗は伝染源になるので、捕植後すぐに除去する。



■紋枯病■

- ・主に水際の葉鞘に暗緑色で不鮮明な斑紋ができ、その後、楕円形で灰色から灰白色の病斑ができる。分けつ最盛期以降、高温多湿の時に発病が多い。
- ・密植の場合や多肥栽培、前年発生が多かったほ場では注意する。
- ・発生しやすい品種や生育旺盛になる心配がある場合は、苗箱に紋枯病に効果のある成分を含む薬剤を使用する。また本田での粒剤散布を検討する。



■トビイロウンカ・コブノメイガ■

- ・西日本では九州を中心に飛来が増えやすく、長期残効型成分を含む苗箱施用剤を検討し、注意報や警報等の情報に基づき対応する。
- ・本田での発生状況を確認する場合は、トビイロウンカは株元を、コブノメイガは上位葉をしっかりと見る。



■カメムシ類■

- ・早生品種(あきたこまち、コシヒカリ)、休耕田、牧草地の周辺、山寄りの水田での被害が大きい。
- ・イネの出穂前は、イネ科雑草に生息し、水田でイネが出穂すると移動してくる。
- ・傾穂期～乳熟期にかけての約2週間が、最も被害を受けやすい。
- ・出穂14日前までに畦畔の草刈りをしておく。出穂直前や直後の草刈りは、カメムシを水田内へ追うことになるので逆効果である。
- ・周縁部の稲穂を重点的に観察し、早期発見に努める。



- ・近年増加しているイネカメムシは、斑点米だけでなく、不稔米を発生させるので、出穂期に防除することが重要で、発生が止まらなければ、さらに追加防除が必要となる。

●イネカメムシ ▶ (1回目)出穂期→(2回目)その7～10日後

- ・イネカメムシ以外のカメムシは、まずは穂揃期の防除を徹底し、被害多い地域は、さらに乳熟期に追加防除をする必要がある。

●小型カメムシ(アカスジカスミカメ等)▶▶ (1回目)穂揃期→(2回目)その7日後

●大型カメムシ(ホハリカメシ、ケハリカメシ等)▶▶ (1回目)穂揃期から3～7日後→(2回目)その7日後



イネカメムシ
(玄米基部を加害)



ホハリカメシ・ケハリカメシ
(無差別に加害)



アカスジカスミカメ
(玄米側面を加害)



アカスジカスミカメ
(玄米頂部を加害)

(3)適期収穫

- ・出穂後の平均気温の積算と落水時期や土質から収穫時期を推測し、青味籾率(10%程度)とほ場の籾水分(25～26%程度)で適期かどうか判断する。
- ・出穂後に高温が続く場合は、成熟が早まりやすいので、特に刈り遅れに注意する。

(4)水管理

- ・田植後は、除草剤の効果を高めるために水位が3～5cm 以上になるよう管理を行い、その後は間断灌水によりガス抜きを行い健全な根の生育を助ける。
- ・土用干しにより土を締めることで倒伏を防止し、生育後期までほ場水分が保持できるよう努める。
- ・出穂後の基本の水管理は「間断灌漑」であるが、高温が続く場合には、用水が豊富な地域では夜間灌水等を行い、地温を低下させ根の活力維持を図る。
- ・早期落水は、未熟粒や屑米、胴割れ米、茶米の増加につながるため、出穂後30日頃を目安にできるだけ落水を遅らせる。

(5) 雑草対策

- ・代かき、あぜ塗りは丁寧にいき、漏水を防止する。
- ・除草剤のラベルに記載されている散布適期を逃さずに使用する。
- ・田植同時処理では、極端に植え穴の戻りが悪い場合に薬害が発生しやすいので、注意する。
- ・除草剤は、水を介して土壌表面に処理層をつくるので、その処理層がしっかりと作られるまでは水深(3～5cm)を保ち、散布後7日間はかけ流しや落水をしない。
- ・漏水しやすく、除草剤散布後に入水が必要な場合は、できるだけゆるやかに入水し、除草剤の処理層が崩れないように注意する。
- ・近年、「ヒレタゴボウ」、「クサネム」、「アゼガヤ」の発生が増加している。これらは、土用干し前後から発生することが多いので、中後期除草剤の使用を検討する。



ヒレタゴボウ



クサネム



アゼガヤ

(6) 高温対策

■ 施 肥 ■

- ・葉色が低下している場合や、出穂後に顕著な高温が予想される場合は、全量基肥一発肥料であっても、窒素成分で1～2kg/10a 追肥を施用し、稲体の活力を維持する。

■ 水 管 理 ■

- ・できるだけ、かけ流し及び夜間かん水等により、地温低下を図る。
- ・早期落水は、未熟粒、胴割粒や茶米の増加につながるため、落水の目安は出穂後30日頃とし、可能な範囲で遅らせるとよい。

■ 適期収穫 ■

- ・刈り遅れは、胴割粒や茶米等が増加しやすいため、適期刈り取りを心がける。

■ 病害虫防除 ■

- ・高温年は、ウンカ類やコブノメイガ、紋枯病などの病害虫の発生が多い傾向にある。
- ・予察情報に留意するとともに、ほ場での観察による早期発見に努め、発生が確認された場合は、早期に防除を行う。



高温障害による白未熟粒



○ 冬期の耕うん（発生している場合に必ず実施）

物理的な破碎を行うとともに貝を厳寒期の寒風にさらす。

いつ・どのように

- ・土壌が乾燥して固い厳寒期（1～2月）に、トラクターの走行速度を遅く、PTO回転を速く（ロータリーの回転を速く）し、土壌を細かく碎くように耕うん。

留意事項

- ・未発生ほ場への貝の持ち込みを防止するため、使用後のトラクターに付着した泥を洗浄。



○ 冬期の水路の泥上げ（発生量が多い場合に実施）

越冬場所をなくし越冬個体を寒風にさらすため、水路の泥上げを地域全体で行う。

いつ・どのように

- ・殺貝効果が高まる厳寒期（1～2月）に実施。

留意事項

- ・掘り上げた泥は、未発生ほ場に持ち込まない。



■ 施肥コスト低減対策技術を公開中 ■

農業研究所が開発した施肥コスト低減対策技術を紹介しています。

- ・レンゲやナタネを緑肥としてすき込む場合の肥料計算ソフト
- ・児島湖流域の6割の水田でりん酸やカリウムが少ないL字型が適する説明
- ・鶏ふん施用から入水まで期間を考慮した施肥設計方法 等



■ 被覆肥料の被膜殻の流出防止について ■

被覆肥料を使用する場合は以下の対策を行い、できるだけ被覆殻をほ場外に流出させないように注意しましょう。

- 畦畔管理：畦塗りの徹底、畦シートの設置、水尻周辺を丁寧に踏み固める。
止水板は畦より高くする。
- 代かき：入水までに田面の高低差をなくす。代かきは浅水で。強制排水はせず、自然落水で水位を調整する。
- 移植：移植前の落水は行わず、自然落水で水位調整をする。
- 施肥：栽培暦等により適正施肥に努める。
- 収穫後：収穫後は、速やかに耕耘を行う。